平　晋一郎

環境について
みなさんもう一度真剣に考えてみませんか？

Save The Kikuchi River

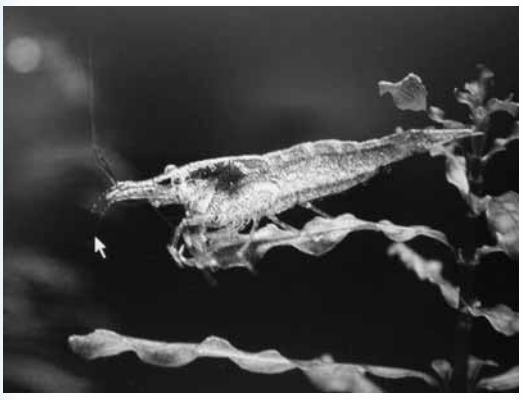
魚類で一番小さいのがメダカであるならば、エビ類で一番小さいのはモエビではないでしょうか。エビ目ヌマエビ科の亜種としてミナミヌマエビと呼ばれています。日本固有種で日本中部以南から鹿児島まで分布しています。離島にはいないようです。近縁種が朝鮮半島、台湾、中国に居ます。強力な農薬が使い始められる前まではショウケで藻の中をひと掬いすれば数十匹は捕れていました。しかし、いつの間にか姿を消してしまい、これまた絶滅かなと思っていたら、最近体長15ミリくらいの小エビを捕ってきて水槽に入れてくれる人がいるようになりました。

熊本ではモエビ、タエビ、サエビ、シャンエビなどと呼んでいます。以前は江津湖や井芹川では腰までつかってタブで掬っている漁師をよく見かけました。最近はチヌやクロ（メジナ）釣りの生き餌として釣具屋で売っているのを見ますが、たいていは韓国、中国から輸入された近縁種か琵琶湖産のスジエビではないかと思われます。私達は子どもの頃、菰田、江栗、竈門あたりにテナガエビ（ダグマ）釣りに行ったのですが、エビ釣りの餌はこのモエビでした。船に乗ってエビ釣りする時は、浅い所でちょっと船から跳び下りて藻の中をショウケで掬い、捕ったモエビに大人達が飲んでいる酒を少し貰って振り掛けると、またたく間に真っ赤になって動かなくなります。それをエビ釣り針に付けて沢山釣ったものです。「エビでタイを釣る」といいますが、「エビでエビを釣る」というのもまたしゃれたものです。

モエビは体長10～28ミリ、小さくて良く見えませんが、5対の歩脚の前2対の先端に小さな鋏があります。川の淀みや池の水草の多い所に生息し雑食性で生物の遺骸や藻類を食べ、コケなど小さな鋏で忙しく口へ運びます。

産卵期は3～10月で、50～100個の卵を腹脚の間に抱え込んで孵化するまで放しません。卵の中で幼生期を過ごし、孵化した稚エビは海へ下ることなく一生を淡水中で過ごします。寿命は約1年ですが数回産卵したら雌は死んでしまいます。菊池川の本・支流の流れの緩やかな浅瀬の砂泥地で藻のある所には必ずモエビの群れが隠れていました。藻はモエビや小魚の格好の産卵場であり、餌場です。モエビという呼び名はそこからきたのではないでしょうか。

小型のエビは常に被捕食者であるという宿命的な立場にあるため非常に臆病でおとなしい生物です。最近は川に居るモエビが極端に少なく、珍しいせいか熱帯魚ショップで売られ、家庭の水槽で盛んに飼われているようです。水槽の中で容易に増殖させることができるし、夏冬を通して1～30℃であれば充分に適応できます。釣り餌として購入した小エビには外国産の近縁種をごっちゃ混ぜにしてある場合があります。その中には日本固有種と交雑可能な種もあるので、もし水を替える時など流出したりしたら、河川の生態系を壊す恐れがあります。絶対に野外に流出しないようにしなければなりません。



ミナミヌマエビ

歴史調査の楽しみ方

日平城跡15

ひらじょうあと

熊本県立装飾古墳館 館長
大田幸博
（元・菊水町史編纂委員会副委員長）

北風が一層、冷たさを増すと「冬将軍」という言葉がマスコミに登場します。実際、昨年末に、滅茶苦茶、寒い現場の日があって、この話題になりました。今月号は、冬将軍と日平城のお話をします。

冬将軍とは、厳しい冬の様子を表現したもので、日本の場合、周期的に南下してくるシベリア気団を意味します。語源は１８１２年の冬に遡ります。この年、ナポレオン皇帝の率いるフランス軍が、ロシアとの戦いに敗れました。敗因の一つとされる厳しい寒さを「冬将軍」と、英国の新聞が書いたことから、この言葉が生まれました。

実際、世界史を紐解くと、諸外国のロシアへの攻撃は、厳冬が原因で何度も失敗していますから、的確な表現でしょう。でも、例外もあります。13世紀の真冬に、モンゴル帝国の軍隊は、難なく、モスクワ等の主要都市を占領しました。モンゴルも冬がとても厳しいので、軍隊が寒さに慣れていたからです。この様に、歴史は画一的でありませんから、付け加えておきます。

話題を日平城に移します。冬場に北谷部から吹き上げる冬将軍の風は、耐え難いものがあります。特に、今冬の現場は、まともに北風を受ける箇所なので、身も心も凍り付きます。精一杯、厚着をしますが、昼食の時は、小さな焚き火をして暖を取らねばなりません。

冬の現場の事は、昨年の「日平城跡４」でも報告しましたが、今回、再度、問答形式で取り上げます。

①守備兵は、山中に常駐していたのでしょうか？

（推論）そうだと思います。有事の際に、不在では、話しになりません。でも、雪のちらつく冬場は、辛い任務であったと思われます。標高３００ｍを越える高い山ですから、特に、夜間は、平地よりも、確実に気温が下がります。北風でも吹けば、たまりません。

②そうなれば、焚き火で暖を取る以外に方法が無いのでは？

（推論）最善策は、焚き火でしょうが、問題は焚き木の確保です。いくら山中とは言え、採集にも、時間がかかりますので、その都度、麓から運び込んだと考えるに至りました。

③日平城の実働年数にも、係わってきますが、城内からは、かなりの数の焚き火跡が見つかるのでは？

（推論）もちろん探しましたが、現在のところ、それらしき窪地の跡や炭化物の露頭箇所は、確認されていません。さらに、山城に必要不可欠な烽火（のろし）穴の痕跡も分かりません。不思議な事です。手がかりくらいは、残っていると思うのですが。

④冬場をやり過ごすには、特に、建物が必要です。日平城には、どの場所に、どんな建物があったのでしょうか？

（推論）この事については以前にも話題にしましたが、「毘沙門（びしゃもん）さん」下の平場にあったと思います。近くには、掘り抜き井戸もありますので、間違い無いと思います。日平城で唯一の本格的な造成地です。山頂が岩場ですから、ここが実質的な城の中心地です。この地に掘立柱建物の兵舎や倉庫があったと思われます。でも、山中ですから、夏場の大風の時に被害を受け易く、その都度、大幅に修理するか、建て直す必要がありました。

他城跡の発掘調査から見て、ガッチリとした構造ではなかったようです。屋根は、板葺（いたぶ）きか藁葺（わらぶ）き、もしくは茅葺（かやぶ）きと推定されます。もっとも、この様な建物であっても、寒さは凌げたと思われます。

〔小結〕現在は、冬の寒さと戦いながら、日平集落側からの登山道の測量をしています。峠付近には、痩せ馬の様な尾根筋に、物見（ものみ）の丘があります。

松尾芭蕉は、古城を訪れて「夏草や、兵供（つわものども）が夢のあと」と詠みました。私はこの句を「枯れ草や、日平兵士（ひびらへいし）の夢のあと」と詠み替えました。

「登山道と物見の丘」